

「クラウド」と聞いたら眉に唾を！

酒井 寿紀 (Sakai Toshinori) 酒井 IT ビジネス研究所

クラウドにもいろいろ

「クラウド」が大流行している。ITの専門誌だけでなく、一般の新聞・雑誌にもしばしば登場する。しかし、この言葉の定義は明確なのだろうか？ そして、クラウドの利点とされているものは、果たしてクラウドでしか実現できないものなのだろうか？

クラウドにもいろいろある。一つはインターネットを介してアプリケーション・プログラム(AP)を提供するサービスで、SaaS (Software as a Service : サービス)と呼ばれる。

もう一つは、やはりインターネットを介して、CPU、OSなど、データ処理に必要な資源を時間貸しするものだ。このうち、データベース等も用意したものはPaaS (Platform as a Service : パース)と呼ばれる。この仲間には、仮想的なCPUだけ貸すものなどいろいろなレベルのものがあるが、ここではPaaSで代表させる。

クラウドだと開発期間が短い？

「クラウドだとソフト開発が不要」、したがって「クラウドだと開発期間が短い」という話がいたるところに登場する。しかし、ソフト開発が不要なのはSaaSであって、PaaSの場合はAPの開発が必要だ。クラウドの事業者の中には、すぐ使えるAPがなくても、カスタマイズ可能なAP、APの各種雛形などを揃えているところもある。これも広い意味でのSaaSと言える。

PaaSでも、機器の調達やOSのインス

トール等は不要になるので、これらを自前で揃える場合に比べれば開発期間が短縮される。しかしその時間は、一般にAPの開発期間に比べればわずかである。したがって、開発期間が大幅に短縮されるのは広い意味でのSaaSを活用したときだ。

そして、SaaSで開発期間が短縮されるのは、APが開発済みだからだ。これはパッケージソフトの利点と同じである。両者とも「オーダーメイド」でなく「既製服」で、その提供方法が違うだけなので、その利点も共通だ。

クラウドだと安い？

「クラウドを使った方が自社で設備を持つより安い」という話もよく聞く。確かに、自社で用意するときは、ピーク時の処理量をさばくだけの設備が必要になり、通常は遊んでいる設備が多い。一方、SaaSを使えば、SaaSのベンダーは多数の顧客に対応しているので、業務の繁閑を平準化でき、遊休設備は少なくなる。そのため、SaaSのベンダー側、ユーザー側を合わせたコストは一般に低減する。

しかし、ユーザーが負担するコストが安くなるかどうかはベンダーの価格設定次第だ。大量のデータ処理が定常的にあるなら、自社で設備を持った方が有利なこともある。

クラウドは持たざる経営？

クラウドは「持たざる経営」で、設備投資が不要で経費負担だけで済み、軽量経営が実現できると書いてある記事もあ

る。これは SaaS についても PaaS についても言える。

近年「アウトソース」が流行っている。コア事業に経営資源を集中して、非コア事業は外部に委託するものだ。クラウドはアウトソースの一種で、「持たざる経営」の上記の利点はアウトソース全般に当てはまる。

ITの世界には「ホスティング」という、インターネットで使われるサーバーの運営を受託する事業が以前からある。またデータセンターの受託業も前からある。これらも「持たざる経営」の利点を狙ったものだ。

クラウドはウェブを使うもの？

「クラウドはウェブを使う、したがってクライアント側にはブラウザだけあればよい」という記述もある。しかし、ウェブを使い、端末側はブラウザだけでデータ処理を行うものは「ウェブ・アプリケーション」と言われ、飛行機の予約、オンライン・ショッピングなど多数ある。

SaaS も PaaS もウェブ・アプリケーションの一種と言えるが、これらはそのユーザーにサーバーの資源自身(CPU、AP 等)を提供することを目的とする。一方、例えば飛行機の予約サービスは、予約する人に座席予約のソフトを使ってもらって、飛行機の座席を販売する。この場合は AP の提供は手段であって目的ではな

い。

クラウドは雲をつかむような話！

このように、クラウドといっても SaaS と PaaS では大きく違うにもかかわらず、両者を区別せずにただクラウドと言うことが多い。それが一般の新聞・雑誌だけでなく、IT 専門誌や IT 企業の社長なので始末が悪い。

クラウド(Cloud)には明確な定義がなく、文字通り雲をつかむような言葉で、他の言葉では言い表せないような新概念でもない。こういう、あいまいで使わずに済む言葉は、できれば世の中から退場してもらいたいものだ。使うのであれば、定義を明確にし、その特長としては、他のものにはない固有の特長をあげてもらいたい。

しかし、今や全世界で使われているので、それを望むのは困難だ。また、クラウドが IT の大きな潮流で、革命を起こすには、言葉の意味が明確であろうとなかろうと、「スローガン」が必要なのも事実だ。

そのため、「クラウド」を目にしたら、読む側が、筆者が何を念頭においているかを推測し、その特長としてあげられているものは、実は従来からあるシステム形態やビジネス形態の特長と同じではないかと疑ってみる必要がある。